



過去、この国エドリアを襲った侵略戦争があった。

そしてそれはすでに四年前のこと。

エドリア王国第一位王位継承者アリシアは、今年で二十歳になる。

以前は無鉄砲で、格闘好きのアリシアは、エドリアのためと、後先構わず戦場に飛び出すような少女であったが、その短慮さは影を潜め、筋肉質だった腕や足は、その面影を見出せない。

元々華奢だった体は、筋肉が落ちたことで、儚さすら漂わせている。

アリシアは、彼女専用の椅子にゆったりと腰かけ、うつろな瞳で外を見ていた。

こんな風になると思ってもいなかった。

きっと、もっと平和になれば、自分の大好きな各闘技へと没頭できるだろうと浮かれていた十六歳の少女は、もういない。

その頃の自分を思い出すと、自嘲的な笑いが漏れてしまう。

（私は、何も知らなかったのね...。）

そのことに気がついたのは、彼女の幼馴染でエドリア城に仕える神官、ギルバートが、司教の命によってリールへと異動になった時だった。

幼い頃からずっと一緒だった彼が離れてしまうと知った時、初めて、切り裂かれるような胸の痛みを知ったのだ。

それからは、彼を城内で見かけても、彼が何か言いたげに自分を待っていても、徹底的に避け、逃げた。

その気持ちがどこからくるのか、その正体がなんなのか、わからないほどアリシアは馬鹿ではなかった。

気がついてしまったのだ。

ギルバートを愛していることに。

そして、彼が自分を見ている瞳が、自分と同じ熱を帯びているということに。

（私が、王女でさえなかったら...。）

リールへとついていき、そこでギルバートの手伝いをしながら過ごす。

なんて幸せなことだろう。

しかし、現実は重く、暗く、アリシアにのしかかってきた。

エドリア王家の直系は、自分だけ。

傍系がいるとはいえ、アリシアが王位を継がないということは、国内を混乱に陥れるだろう。

だからといって、平民であるギルバートが、アリシアと対等な位に上り詰めるまで待てるだろうか？

その頃には、自分はもう、子どもを産むこともできないくらい老いているだろう。

国を捨てることはできない。

だからと言って、ギルバートを王家に迎え入れることもできない。

だから、アリシアは口をつぐんだ。

黙って、彼の旅立ちを見送った。

それが、お互いの幸せだと、心に言い聞かせて。

そして、現在。

アリシアは、明日、結婚する。

相手は、近隣の国王、ガイウス。

気乗りしない見合いを何度も続け、断り続けてきたものの、ガイウスとの結婚には、外交事情が絡んでいた。いわゆる、政略結婚をすることになったのである。

ガイウスは、先の戦いでエドリアを侵略してきた、いわば敵である。

戦が終わりに、エドリアがそう簡単には手に入らないということを知ったガイウスは、しばらくは大人しく内政をしていたが、彼の野心が、再び頭をもたげてきたのである。

エドリアは、決して強大な国家ではない。

強国フラディアとは同盟を結んでいるが、他国が攻めてくれば、エドリア一国では押さえられない。

だからこそ、父王は決断したのだ。

いつまでも結婚する意志を見せない娘、アリシアとガイウスを結婚させることで、エドリア領土を焦土にすることなく、ガイウスの手に入れさせる。

また、エドリアとしても、ガイウスの治めるルンディア領を手に入れたようなものだ。

巨大な国家は狙われやすいが、強国フラディアとは同盟を結んでいるし、世界で一番強い王宮戦士を抱えていると言われるバトレシアは、平和路線を選んでいる。

当面は、エドリアにて戦争が起こされる心配はない。

そこに、アリシアの意思は関係なかった。

アリシアは、ある日突然父王に呼び出され、そのことを告げられたのである。

ギルバートと離れ、三年。

すでに生きる気力を失っていたアリシアにとって、その命令は、死と同じだった。

一生、処女王として生きる覚悟をしていた。

誰とも体を交わさないと決めていた。

命令は、彼女の心を蝕んでゆき、アリシアは、一年ですっかり亡骸のようになってしまった。

ロボットのように、日課をこなし、あとは、焦点の合わない目で外を見つめ続ける。

そんな生活を一年も続けてきた。

ガイウスが訪ねてきても、会いはするが、触れることは決して許さなかった。

「婚姻を交わしてから。」

それが、彼女の常套句になっていた。

ガイウスはじりじりしていたが、アリシアの意思を踏みにじて婚約が破談になるよりはずっとマシだと、我慢を続けている。

元々可愛らしい顔立ちだったアリシアは、成長し、更に、生きる気力を失くし精彩を失ってから

、逆に、美しさが際立つようになっていた。

彼女にとって、それは、皮肉以外の何者でもなかった。

彼女がここまで病んでしまうまで、誰も手助けをしなかったわけではない。

父とて、けして娘が可愛くないわけではない。

ただ、ギルバートへの想いを知らないのだ。

夫ができ、子どもが生まれれば、生きがいを見出せるかもしれないと、父は思っていた。

そして、彼女の乳母であった、エリザベータ。

彼女は知っていた。

彼女の気持ち、ギルバートだけに向いていることを。

だからこそ、平民を王族に入れることはできなくても、せめて結婚はしないという彼女の意思を尊重してきた。

彼女の次に王位を継ぐものは、傍系でいい。

直系は絶たれるが、アリシアをギルバート以外の誰かと結婚させようとするれば、その時点で、アリシア自身が生を拒みかねない。

エリザベータは、そこまで承知していたのだ。

その彼女も、二年前の冬に、風邪をこじらせ、肺炎で世を去った。

アリシアとガイウスの婚約を阻止できるただ一人の人を失ってしまったことは、アリシアにとって、悲劇だったのである。

そして、つつがなく結婚式の準備が終わり、とうとう、明日が式という日。

ぼんやりと外を見ていたアリシアは、この日を待っていた。

逃げ出す日を。

ギルバートには、知らせていない。

リールで一目会い、その後はバトレスシアを頼るつもりでいる。

そして、バトレスシア王は、開かれた国政で有名な人格者だ。

最強とうたわれる王宮戦士たちを抱えるバトレスシアに、戦を挑む命知らずな国は無い。

危険なのは、フラディアを通ることだ。

同盟国であるフラディアで発見されてしまえば、すぐに連れ戻されてしまう。

しかし、エドリアからバトレスシアへ行くには、フラディアを通る以外陸路はない。

海路は目立ちすぎる。

陸路であれば、フラディアへの旅人たちに紛れることもできるだろう。

そして、夜半。

寝台で横になっていたアリシアは、おもむろに起き出し、ベッドの下に隠し持っていた旅人の服を取り出した。

見咎められないように、ところどころ破き、汚してある。

明日が結婚式ということもあり、警備の手は教会にも回されている。

そのため、城内外の警備は手薄だ。

そっと自室を出ると、もう使われていない向かいの部屋に入る。

かつてエリザベータの部屋だった場所だ。

「...ごめんね、エリザ。」

ポツリとつぶやいて、部屋の窓を開け放ち、そこからロープを使って庭へ降りてゆく。  
城の庭を見渡すと、裏庭であるためか、こんな風でエドリア城は大丈夫なのかと思ってしまうほど兵が少ない。

元々の俊敏さを生かして、素早く兵たちの横を通り過ぎる。

朝になれば気づかれてしまう。

そうなる前に、できるだけ遠くへ行かなくてはいけなかった。

隣町フーレに着く頃には、太陽が少し顔を出し始めていた。

焦って走る速度を速めるが、やはり、昔よりも体力が落ちている。

(ちゃんと、鍛えていればよかった...。)

後悔するが、すでに遅い。

もう、アリシアは選んだのだ。

王位も、父も、何もかもを捨てて、バトレシアへ亡命すると。

交渉は、バトレシア王を挟んで行えばいい。

そして、身の安全を確保して、ほとぼりが冷めたなら、ギルバートと会いたい。

できるなら、一生添い遂げたい。

そのためには、今は、とにかく一人で逃げるのが大事なのだ。

一人走る夜道が、どんなに心細くとも。

朝日が昇り、太陽が南中にさしかかろうというとき、アリシアはリールにたどりついた。

まだ、兵の手は及んでいない。

しかし、急がなくては。昔よりも、確実に足は衰えている。

追いつかれるのは時間の問題だ。

記憶にある教会を必死に思い出しながら、ギルバートを目指して町を走った。

そして、とうとう見つけた。

教会の裏、畑で、庭仕事をしている彼を。

三年ぶりにギルバートを見たアリシアは涙した。

何も変わっていない彼の姿。

さらさらの金髪。

切れ長で涼しい目元、美しい翡翠色の瞳。

穏やかな笑みをたたえる口元。

すらりとした背。

柔らかな雰囲気をもった彼は、どこも変わっていなかった。

もう、これで、思い残すことも無い。

気づかれないうちに、ここを去り、バトレシアへと向かわなければ。  
もう一度、彼に再会するために。  
そう心に決め、教会の彼に背を向け、再度走り出そうとした、そのとき。

「...姫様？」

その聞き覚えのある、柔らかなテノールに、アリシアは反射的に振り返ってしまった。  
驚いた表情でアリシアを見つめるその瞳に、自分が映っている。

「ギ...ルッ...！」

耐え切れなくなり、ぽろぽろと涙がこぼれた。  
そんなアリシアを見て、ギルバートは慌てて駆け寄った。

「どうなされたのですか！？今日は婚礼の日では...！？」

アリシアとガイウスの結婚の話は、エドリア中に知れ渡っている。  
もちろん、ギルバートの耳にも入っていた。  
もう、彼女は大切な人を見つけたのだと、彼はそう思っていた。  
だというのに。  
目の前の彼女は、三年前に比べて、明らかに弱っている。  
明るく太陽だった彼女は、今はまるで暗い大雨のようだ。  
顔も腕も、全てが痩せ細り、逆にそれが美しさを引き立たせている皮肉。  
ギルバートは、気がついた。  
アリシアが、逃げ出したことに。  
理由は、わからない。  
しかし、彼女は確かに逃げ出し、自分の元へ来た。  
声をかけられなかったことから、きっと、会うつもりはなかったのだろう。

どうして...？

疑問が、彼の心を支配した。  
なぜ、彼女は逃げ出したのだ？  
どうして、自分のところへ来たのだ？  
わからない。  
わからないが、わかっていることは一つだけ。  
エリザベータが生きていれば、きっと彼女もそうしただろうということだけ。

「...姫様。この命に代えても、姫様のことはこのギルバートがお守りいたします。」

それは、愛し合う二人の、悲劇の幕開けでもあった。  
ギルバートが、そう跪くのを見て、アリシアは狼狽した。

ちがう。  
彼を巻き込みたくない。  
彼を連れて行くわけにはいかない。  
自分だけなら、命は助かるだろう。  
でも、一緒に行けば、彼は助からない。  
一国の姫をかどわかした大罪人として、死刑になるだろう。

それなのに。

何も言うことができなかった。  
そんなに酷い表情をしていたのか。  
ギルバートは、アリシアを見上げると、くすりと苦笑した。

「...姫様は、昔から、嘘が苦手です。顔に全て、書いてありますよ。逃げ出して、いらしたのでしょうか？理由は存じません。理由など知らなくとも、主の命をお守りすることは私の役目...」

「やめて！」

ギルバートが言い切らないうちに、アリシアは叫んでいた。

全て役目だと、使命などと、言わないで。  
あなたの気持ちはもう知っている。  
十分すぎるほど知っているのよ。

「そうよ、私は逃げた！あなたが好きで、恋しくてたまらなくて、こんな姿になってしまったのは、あなたを失ったから！こんな婚姻、エリザがいれば止めてくれたわ！でも、もうエリザはいない！だから、逃げるしかなかった！一目あなたを見て、また逃げるつもりだった！私と一緒になんて来ないで！死罪になるとわかっていて、ついてなんてこないで！使命だなんて言わないで！私はもう、あなたの気持ちは知っているのよ！」

アリシアの剣幕に、ギルバートは呆然とした。

今、姫様は何とおっしゃったのだ？  
私を好いてらっしゃると？  
私が死罪になるからついてくるなど？  
使命だと、言うなど？

「ひめ...さ...ま...？」

震える両足で、なんとか立ち上がり、アリシアを正面から見てみれば、彼女のなんと小さいことか。

エドリア城で過ごしていた頃は、誰よりも勇敢でたくましく、背の割りに大きく見えた彼女が、今はとても小さい。

やせ細ったからだけではないだろう。

自分しか頼る者がいない。それに気がついてしまったことで、ギルバートにはアリシアがとても小さく見えたのだ。

「ならば、私も逃げましょう。」

決然とつぶやいたその言葉に、アリシアは殴られたような衝撃を受けた。

「駄目よ、私をかどわかしたと、死罪にされる！生きていて欲しいのよ！だから声もかけないで立ち去るつもりだったの！お願いだから、ここで待っていて！バトレシアの王様から、お父様にかけあってもらおうから！晴れて自由になったら、迎えにくる！だからお願い！ここで待っていて！死に向かうようなことはしないで！」

必死のアリシアを、ギルバートは黙って抱きすくめる。

迎えにくるなど、男の言うことだ。こういうところは、変わっていないなと心でつぶやきながら。

「姫様。私は。ずっとあなたに恋焦がれてきたのです。やっと通じ合えたというのに、離れ離れになれと命じるのですか？この三年、私が長く感じなかったとでもお思いですか？」

ギルバートの腕の中で、アリシアは泣いた。

そして、覚悟した。

彼は、頑固で、頑なだ。

きっと、どうしたって自分と一緒にいけるだろうと。

リールに来なければよかったと後悔する反面、ギルバートと気持ちが通じ合えたことが嬉しくてたまらなかった。



「...わかったわ。おまえは、私と来るといのね。それは、命に関わると知っていて。」

静かにそう呟くと、「はい。」と答える声がした。

名残惜しそうにゆっくり体を離し、二人は、リールを飛び出した。

リールから国境までは、町が無い。

それだけ見つかりにくいということだが、エドリアから走り続けてきたアリシアに、休むところがないのは苦しいことだった。

しかし、捕まればギルバートが死罪になることがわかっていながら、足を止めるわけにはいかなかった。

また、国境には、問題がある。

エドリアの兵士が常駐しているのだ。

もし、伝書鳩を使って連絡が行っていれば、大量の兵士が待ち構えている可能性も高い。

しかし、バトレシアへ向かうには、フラディアとの国境を越えて行かねばならない。

「エリザがいれば...」

それは、二人共通の思いだった。

エリザベータは、瞬間異動呪文を使うことができた。

魔法力が高いエリザベータは、エドリアでも屈指の魔法使いと言われ、魔法学の講師も務めていたほどだ。

しかし、エリザベータが居ない今、アリシアとギルバートにはどうしようもない。

必死で走り続け、もう少しで旅の扉、というところだった。

「アリシア姫様！」

「アリシア！」

はっと後ろを振り返ると、馬に乗る父と、婚約者ガイウス。

そして、多数のエドリア兵が、今まさに追いつこうとしていた。

「姫様！」

ギルバートが、アリシアの手を取って、更に走る。

とにかく、フラディアまで。

そうすれば、治外法権だ。

フラディアに、この兵を連れていくことはできない。

そんなことをすれば、戦争と思われても仕方が無い。

二人がフラディアに入ってさえしまえば、王たちは、フラディア王に書状を出し、搜索、保護を願い出なければならないのだ。

「ギルバート...！おまえ！王への忠誠を忘れたか！」

「私の主は神と姫様でございます！その忠誠、一度も違えたことはありません！」

「戯言を！」

叫ぶ王とガイウスたちに、ギルバートは幻影を生み出す呪文を紡ぎ、投げつける。

「ヴィジョン！」

幻影が、王たちを惑わし、足を止めさせる。

「姫様！今のうちに！」

そう振り返るギルバートの眼に、信じられない光景が飛び込んできた。

「姫様！？」

何年も、まともに食事もとらず、運動することも怠ってきたせいだろう。

アリシアは、極限だった。

ずっと極限状態だったのだ。

それが、父とガイウスを見たことで、一瞬絶望が頭を掠めてしまった。そして、彼女の気力を萎ませ、体中から全ての力が失われてしまった。

そして、力尽きた。

ギルバートの眼に映るのは、息も絶え絶えに倒れる、アリシアの姿だった。

「姫様っ！」

夜の森に、ギルバートの絶叫がこだました。

アリシアが倒れてしまっただけでは、ギルバートは無力だった。

彼女を抱きかかえ、必死で走るが、苦しそうに肩で息をする彼女がフラディアまで保つだろうか？

いや、保たない。

神官であるギルバートは、少しの医療知識なら備えていた。

だからこそ、彼はわかった。

このままアリシアをフラディアまで連れて行くということは、彼女の死を意味すると。

眼が覚めたとき、アリシアは、見覚えのある部屋の中だった。

自室。

そのことに気がついたアリシアが跳ね起きようとする、侍女がそれを止めた。

「姫様。病み上がりのお体で無理をしてはいけません。」

「病み上がりですって...!？」

アリシアは一週間前、父王とガイウスと共に、城に帰ってきた。

いや、帰ってきたというよりは、虫の息のアリシアを、父王が必死に抱えてきたという方が正しかった。

「ギルバートは...！」

「その名を口にしてはなりません！姫様を誘拐した大罪人として、処刑が決まっています！」

ギルバートの名を口にしたとたん、侍女の顔つきが厳しく変わる。

以前は、城にまだギルバートが居た頃は。エリザベータが居た頃は。

ギルバートの名が、こんな風に扱われることはなかった。

むしろ、好ましく人々の口にのぼったものだ。

若く眉目秀麗な神官と、人々はこぞって彼をたたえた。

それが、自分の勝手な行動で、この始末だ。

人の心の恐ろしさを、アリシアは思い知らされた。

目の前の侍女とて、以前はギルバートに熱を上げていた。もしかしたら、侍女よりアリシアを選んだことが、彼女を対ギルバートに変えてしまったのかもしれない。

「姫様がお目覚めと、王様にお伝えしてまいります。」

そう侍女が辞去し、すぐに父王とガイウスがやってくる。

申し訳なさりと憎しみとが、入り混じった、複雑な感情で、アリシアは二人と相対した。

「アリシア。お前のやったこと、わかっておるな？」

「...間違ったことをしたことは、わかっているわ。」

「そんなに、私のことがお嫌であれば、お断りくださればよかったのに。」

「そのようなこと、できるわけがないとわかって、よくそのようなことが言えますね、ガイウス様。」

「...どういう意味か理解しかねますが。」

「私に、拒否権など最初からないということです。」

「当たり前だ！お前は一国の姫としての立場をなんと心得ている！我が娘として、我が国の娘と

して、国のために尽くすのが王族！それすらも放棄したのだぞ！お前は！」

いきり立つ父に、アリシアは、それ以上何かを言う気にはなれなかった。

父の言うことは、王族として、正しい。

それは、わかっている。

でも、一人の娘として、そんな風に自分を扱って欲しくなかった。

ただの、道具として、自分を扱って欲しくはなかったのだ。

「お父様は...何も分かってくださらない...。」

小さくつぶやいた。両目から、涙があふれ出し、止まらなかった。

一度それを口にしてしまえば、決壊が切れたかのように言葉は止まらない。

「王位は継ぐと、申し上げていたのに...。それだけでは何故不満なのですか...。エリザがいれば...エリザは...私の後が傍系でもいいと言ってくれたのに...。私は...私は！ギルバート以外を愛することなどできません！」

「それが傲慢だというのだ！お前は何もわかっていない！国を守るということがどういうことかわかっていない！子を成し、その子が王位を継いでいくということの、血統の大切さを知らない！」

「子を成すのであれば、ギルバートでなければ嫌です！」

「あれは平民だぞ！平民の血をいれるわけにはいかぬ！」

「だから、私は一生独身でいると決めていたのです！なのに...なのに...っ！」

アリシアの視線は、父王だけでなく、ガイウスにも移る。

その瞳は、強い憎しみを宿していた。

その視線にあてられた父王は、これ以上何かを言うことができず、ガイウスを残して退室した。

残ったガイウスは...笑っていた。

「...なにが、おかしいのですか...。」

「いえ？一国の姫ともあろうお方が、随分夢見がちだと思っただけですよ。」

「夢を見ることさえ許されませんか！？」

「そんなことは言っていないでしょう。でも、夢を現実にするのは、いささか乱暴すぎたのではありませんか？この結果が、このザマだ。お美しいアリシア様は、まるで気がふれてしまったかのように、このガイウスも心を痛めているのですよ。」

「っ...！」

からかうように、歌うように話すガイウスの言葉から、アリシアへの労りの気持ちは感じるこ

ができなかった。

むしろ、彼から感じるのは、憎悪。

笑みを絶やさぬままベッドに近づいてくるガイウスに、アリシアは恐怖を覚えた。

「あなたに、現実を見せてさしあげましょう。」

そうアリシアの耳元で囁いたガイウスは、今や自由に動かすこともままならないアリシアの体を抱き上げ、連れ去った。

ギルバートの、処刑の場へ。

冷たい牢獄に、彼はいた。

首をはねられる。

リールでアリシアに再会したときに、すでに覚悟はしていた。

彼女の姿を見て、もう、長くはないと気が付いていた。やせ細り、土気色だった顔色。どのような生活をしてきたか、すぐにわかった。弱り切った体に鞭を打ってリールまでたどりついたアリシアに、生命力を感じる事が出来なかった。

だからせめて、少しでも彼女の生きるよすがである希望を、繋ぎ止めてやりたかった。

そして、万が一、一緒にバトレスシアまで行けたならと、甘い夢を見ていた。

夢想、だな。

『あなたは甘いのです、ギル。動くなら、もっと先の先まで考えておかねばなりません。』

そう言ったのは、尊敬する魔法使いで、アリシアの乳母、エリザベータ。

「そうですね、エリザベータ様…。私はやはり、甘いままでした…。」

石で作られた牢獄の天井は、やはり、何も答えてはくれなかった。

「でも、エリザベータ様。私は、最後に手に入れました。姫様を。姫様のお心を。生きている間では、きっと無理だと思っていた、あの気高きお心を。だから、私は、幸せなのです。姫様の命と引き替えに、自分の身が散ろうとも。あの方さえ無事であれば。生きてくれさえいれば。それだけでいいのです…。」

嘘だ。

死にたくない。

まだ、彼女が足りない。

口づけも交わしていない。

彼女を抱いてもいない。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

神とは。

私の信じている神とは。

かくも残酷なものだったろうか？

ああ。

違う。

私が神に背いたのだ。

あのとき。

残れと言った姫様の言葉に従わず、姫様に付き従った。

神とも崇めた姫様の言葉に背いた。

その罰なのだ。

自嘲気味に、ギルバートの口から笑いが漏れる。

姫様にはもう二度とお会いできない。

私があなたに背いたから。

でも、愛しています。アリシア様。

死すとも。

この身が滅びても。

気が付くと、ギルバートは、ロザリオを握りしめ、牢獄の天井窓に祈っていた。

彼女に。

アリシア姫に。

幸いあれ、と。

アリシアが連れてこられた時、ギルバートの処刑はまさに始まったばかりであった。

ガイウスの腕から降りようともがくが、さすがに、エドリアから旅の扉までの長距離移動が祟り、その腕から逃げることはできない。

ガイウスは、黙ってアリシアを処刑場の最前列へ連れてゆく。

「あなたは...何を...！」

憎しみのこもった目でアリシアがガイウスをにらみ付けるが、ガイウスは歯牙にもかけない。

「あなたの愛した男の、最後を。それくらいは、見せて差し上げようと思ひまして。」

「...っ！なんて...ひどい...！なんて悪趣味なの...！」

そうアリシアが呟くと、ガイウスは眉間に皺をよせ、不快さを表す。

「あなたこそ、悪趣味でしょう。こんなにも私はあなたを慕っているというのに、婚礼の前夜に男と逃亡だなんて。」

その言葉に、アリシアは凍り付く。  
ガイウスが、自分を...！？

「ねえ、悪趣味だとはお思いにならないのですか？我が新妻よ。それとも、そんなにも私がお嫌いですか。だからこそ、今まで私はあなたに触れることも叶わなかったのでしょうか？」

さすがにアリシアも答えに詰まる。

「ああ、始まりますね。」

はっとその言葉に、処刑場を見る。  
そこには、愛しくてたまらないギルバートの姿があった。  
首にも、手にも、足にも錠がされている。  
そして、彼の美しい顔は、血や砂で汚れきっていた。

「.....！」

あまりの衝撃に、アリシアは言葉も出ない。

「ふふ、色男も、台無しですね、我が新妻。」

ガイウスの言葉も届かず、アリシアはギルバートを見つめ続けていた。  
目をそらしたくなかった。  
そらしてしまったら、その瞬間に彼の命が消えてしまいそうな気がして。  
断頭台へと歩を進めるギルバートが、アリシアに気が付く。  
彼へと手を伸ばし、必死で彼女を抱きかかえている男から逃げ出そうとしている。  
その姿を見ることが出来ただけで、ギルバートは満足だった。

「...姫様。愛しております。」

そうつぶやき、彼は、アリシアへ、微笑んで見せる。

その微笑みが、アリシアが最後に見た、ギルバートの微笑みだった。

直後、アリシアは意識を失った。

彼女が覚えているのは、断頭台上ったギルバートが見せた笑顔と、その直後落ちてきた鎌によって落ちた、愛する人の首。

「いやああああああああ！！」

処刑場に絶叫が響き渡り、そして、アリシアは意識を失った。

ガイウスが、悲しげにアリシアを見つめていることなど、知りもせず。

目覚めた彼女の傍に、父王とガイウス、侍女がいた。

「アリシア。気分はどうだ？」

「アリシア様。大変な失礼を...。」

しかし、彼女はその声たちに反応しない。

彼女は、心を閉ざしたのだ。

ギルバートの死によって。

侍女のはからいで、父王とガイウスが退室し、侍女と二人だけになっても、それは変わらなかった。

何を話しかけても、何をしても、アリシアは反応を見せない。

彼女の世界は、もう、全て、色あせていた。

「どうしろというのだ、アリシア！死んだ者は戻らぬぞ！」

「...処刑場になど、連れて行かねばよかった...。」

その言葉に、父王はガイウスにつかみかかる。

「何故処刑場などにお連れになった！？あの子の心は、壊れてしまった！もう、戻らぬかもしれないのですぞ！」

ガイウスは、自分より少し小さい父王の目を見る事が出来ず、目線を逸らし小さく答える。

「決定的な場面を見れば、諦めることができるかと...。」

「馬鹿なことを！ギルバートの死を見たことで、あの子の中でギルバートは永遠だ！見張りを付けておかねばならぬ...。何かしでかす前に！」

そして、父王の懸念していた、それは、その夜すぐに起きる。

どんなことにも反応を示さなかったアリシアは、寝台からそっと立ち上がり、鏡台からナイフを



取り出していた。

「ギルバート...。」

彼女の小さなつぶやきは、誰にも聞こえることなく、闇に吸い込まれていく。

彼女の胸を、思い出が去来してゆく。

初めて出会ったとき。

彼の講義が難しいと文句を言ったときの、彼の困った表情。

彼の煎れる紅茶が美味しくて、いつも彼に煎れてもらっていたこと。

戦場に出るとき、反対したくせに、結局エリザと一緒にしてきたこと。

...これなら、ずっと戦争をしていた方がましだったかもしれないわね。

あのときの心細さを支えてくれたのは、他ならぬ彼だったのに。

ケガばかりする自分を、いつも優先的に治療して、仲間から鬨聲をかったときの彼の恥ずかしそうな表情。

そして。

城へ戻り。

温かな日常が続いていた。

ずっと続くと思っていた。

幸せだった。

彼が去り、エリザベータが亡くなるまでは。

お父様は優しい。

でも、国のことしか考えていないの。

大臣は、もっとひどい。

私は、きっと、赤ちゃんを産む、いい牝馬だと思われているに違いないわ。

ガイウスは、恐ろしい。

侵略をしかけてきた国と婚姻だなんて、エリザが居たらきっと反対したわね。

だったら。

だったら。

ギルバートがもういないなら。

あなたがもういない世界なんて。

いらない。

アリシアが胸にナイフを突き立てたのと、不穏な空気を感じて部屋へ飛び込んで来た侍女がその瞬間を目撃したのは、同時。

侍女は言う。

「あの時のアリシア様は、本当に嬉しそうな表情をしてらっしゃいました」

と。  
血に染まり、血だまりに倒れるアリシアは、もう、息を吹き返すことはなかった。

その後、エドリア。

婚約者を失ったガイウスは国へと戻り。

エドリアは、直系王女が急逝したことで、傍系同士之争いが激化し、国内が混乱。

その隙を隣国ベラヌイアに突かれ、ベラヌイア領となる。

巨大化したベラヌイアと、フラディアとの間で戦争が始まるが、それはまた、別のお話。